

関西外大日本語実習報告書 —片鉾・中宮キャンパスでの概要と報告—

鹿浦 佳子

要旨

関西外国語大学（以降、関西外大）の日本語教員養成課程は中宮学舎と穂谷学舎の両学舎で行われている。日本語教員養成課程の一つの科目である日本語教育実習（以降、実習）は留学生別科がある中宮学舎においてのみ行われている。本稿では、1987年に始まった中宮学舎（2002年に中宮に移転以前は片鉾学舎）における25年の歴史を持つ日本語教員養成課程についての概要と歴史を振り返る。

【キーワード】日本語教員養成課程、日本語教育実習、中宮学舎、留学生別科、
インターンシッププログラム

1. はじめに

関西外大の日本語養成課程は1987年に日本語学習者人口の増加に対応する人材を育成するために設けられた。この課程は文科省によって示された教育内容と教育水準に基づいて日本語の構造、日本人の言語、日本語の教授法および日本事情に関する専門科目30単位を履修、本学留学生別科日本語コースで3週間の日本語教育実習を行い、論文提出、日本語教員能力検定試験を受験することになっている。この教育実習を受講するためには教員免許状取得に関わる教職課程を履修していること、専門科目、日本語関係科目において規定以上の成績、またTOEFL500点以上を取っていることなどが条件となっている。留学生別科日本語コースの教員が日本語教員養成課程の専門科目も担当しているため、日本語教員養成課程を受講する3年間、また実習期間中も含め、指導教官から日本語教授法についてきめ細やかなアドバイスを直接受けられるのが本学の特色である。留学生別科日本語コースでの実習では、海外の英語圏の大学で日本語教授を行った教員が行う授業を見学し、実践的な指導法を学び、その後実際

に教壇に立つことになる。日本語養成課程を修了した学生の中から、毎年約 10 名を選考し TA に任命し、提携大学に派遣している。派遣前には留学生別科で担当教員の指導の下で再度の日本語教授の研修が行われているため、提携大学から高い評価を得ている。学位のみで大学レベルの日本語の授業を担当出来る機会が与えられることは稀であり、日本語教授の経験があるかどうかということが日本語教員としてのキャリアを追及していく上で非常に大きな評価対象ともなるという難しい状況の中で、本学のインターンシッププログラム制度は将来日本語教員を目指す者にとっては大きな特典の一つである。

1987 年に関西外国語大学の外国語学部で日本語養成課程が始まって以来 25 年間、2011 年度終了までに 343 人（内 2012 年春学期に実習予定の 5 名を含む）の実習の履修修了者を輩出してきた。2009 年に行われたカリキュラムの変更により、2012 年度からは実習の他に新たに実習演習が始まる。実習は引き続き行われ、多くの卒業生はその後も日本語インターンシッププログラムに参加し、海外の大学で TA として日本語教授が行える。

2. 日本語教育養成課程における実習の概要

2.1 日本語教員養成課程について

2.1.1 実習要領（2009 年度からの新カリキュラム）

2.1.2 履修資格

履修資格は次の各号のすべてを充足する者とする。

①教員養成課程を履修している者。

②各学年の修了時、学内成績および出席状況等が優秀である者。

（修了証の授与）卒業所要単位を修得し、かつ所定の単位を修得した者に対して「修了証」を授与する。ただし、日本語教員能力検定試験を受験することが前提となる。

（履修方法）次の表のように、各区分に規定された最低必要単位数を充足し、合計 30 単位以上を修得すること。

2.1.3 日本語教員養成に関する専門科目および配当年次

下記科目のうち、「日本語教育実習演習」および「日本語教育実習」は卒業単位に算入されない。

日本語の教授に関する科目のうち、「日本語教育実習演習」または、「日本語教育

| 授業科目 | | | 配当年次単位数 | | | | 必要単位数 |
|--------------|----------|--------------|---------|----|----|----|-------|
| | | | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | |
| 日本語の構造に関する科目 | 必須 | 日本語学概論 | | 4 | | | 12 |
| | | 日本語学Ⅰ | | 4 | | | |
| | | 日本語学Ⅱ | | 4 | | | |
| 日本人の言語に関する科目 | 選択 必須 | 音声学・音韻論 | 4 | | | | 4 |
| | | 形態論・統語論 | 4 | | | | |
| | | 意味論・語用論 | 4 | | | | |
| 日本語の教授に関する科目 | 選択 必須 | 日本語教育法Ⅰ | | | 4 | | 10 |
| | | 日本語教育法Ⅱ | | | 4 | | |
| | | 日本語教育実習演習 | | | | 2 | |
| | | 日本語教育実習 | | | | 2 | |
| 日本事情に関する科目 | 選択 | Japanology A | | 4 | | | 4 |
| | | Japanology B | | 4 | | | |
| | | Archaeology | | 4 | | | |
| | | 合計 | | | | | 30 |

実習」のいずれか1科目を必ず修得しなければならない。

日本語の構造に関する科目：「日本語学概論」「日本語学Ⅰ」「日本語学Ⅱ」は全て3年次終了時まで修得していること。

日本人の言語に関する科目：「音声学・音韻論」「形態論・統語論」「意味論・語用論」のうち、1科目以上を3年次終了時まで修得していること。

日本語の教授に関する科目：「日本語教育法Ⅰ」「日本語教育法Ⅱ」は3年生に修得すること。「日本語教育実習演習」「日本語教育実習」のうち、どちらか1科目を4年次に修得すること。

日本事情に関する科目：1科目を選択し、3年次終了時まで修得すること。

日本語教育実習演習は、日本語教員養成課程を履修しようとする学生同士による日本語教授法研究または演習を行う通常授業科目である。日本語教育実習演習は、日本語教員養成課程に関する専門科目中、3年次までの専門科目に合格していること、かつ英語の教育実習判定に合格していることが条件となる。

日本語教育実習は、本学が併設する留学生別科において行う実習と、本学が単位互換提携を結んでいる中国の大学において行う実習の二種類があり、それぞれ定員枠が予め決められているため、履修希望者の中から教務委員会が選考により履修者および実習先を決定する。（本稿では、留学生別科において行う実習に関してのみ扱う。）新4年次3月の日本語教員養成課程ガイダンスと4年次9月に行われる日本語教育次週

直前ガイダンスの参加は必修である。履修者はさらに4年次7月初旬に日本語教員による最終選考面接を受け、合格者のみ9月以降、実習を行う。実習開始までに与えられた課題を提出する。また教育実習終了後、担当教員から出されるテーマについての論文（レポート用紙10枚程度）も提出しなければならない。

実習期間は、留学生別科での3週間。（本稿では、中国の大学における春学期または秋学期のいずれか1学期間の実習に関しては扱わない。）

日本語教育実習を履修するためには、3年次終了時点で次の各号の要件をすべて充足しなければならない。

- ① 日本語教員養成課程に関する専門科目中、3年次までの専門科目を合格していること。ただし、教授会で認めた海外留学等により当該要件を充足できない場合は、教務委員会から別途指示する。
- ② 卒業所要単位数のうち、未履修の単位が12単位を超えないこと。
- ③ コア必修科目およびコア選択科目の総平均が70点以上であること。
- ④ コース科目（他コース科目含む）およびコース共通科目の総平均が70点以上であること。
- ⑤ 日本語教員養成課程に関する専門科目の平均点が80点以上であること。
- ⑥ 留学生別科における実習の場合は、当該年度受験のTOEFLが500点以上であること。

2.2 日本語教育実習

2.2.1 実習時期と期間

秋学期2グループ（実習生の人数によって1グループで終わる場合がある）、春学期1グループの実習時期にそれぞれ3週間の実習期間がある。

2.2.2 実習開始時期

- ・秋学期第一グループ：学期開始後の4週目ごろから開始。
- ・秋学期第二グループ：中間試験後から期末試験の中間から開始。
- ・春学期グループ：学期開始直後から開始。

日本語の実習は学期中に行われるため、学生は学部の授業を優先できる。時間は9時から20時半まで控室が準備されており、その間は準備や作業、個人の勉強が出来る。実際に実習授業をする時は、学部の授業が公欠扱いになり、実習を優先できる。

2.2.3 実習レベル

関西外大の留学生の日本語クラスは会話クラス（SPJ）と読み書きクラス（RWJ）に分かれており、それぞれレベルは1（SPJ1, RWJ1）から7（SPJ7, RWJ7）までである。会話クラスの初級レベル（SPJ1, SPJ2）担当の専任教員が1～2名の実習生を受け持つが、その学期の実習生の人数や日本語クラスのセッション数により、中級（SPJ3, SPJ4）レベルの教員まで担当することもある。

2.2.4 実習内容

- ・1週目：コピーなどの作業、宿題、クイズなどの添削、担当教員のクラスの見学。
同レベルの読み書きクラスの見学。
- ・2週目：担当教員のクラスの見学、教案作成後2～3時間の実習。
- ・3週目：担当教員のクラス以外のクラス見学。

毎日教育実習簿にその日の授業観察、感想を記録し、教育実習予定内容、担当クラスや見学のクラスの時間割、教案の添付、実習先の状況、反省録を記入する。教員より出された課題レポートを締め切りまでに提出する。最後にまとめのコメントを記入、実習簿を教員に提出する。実習後担当教員より実習批評を受け取る。担当教員は教案、実習内容、実習態度、レポート、実習簿を対象に評価する。評価項目としては、日本語教員としての適正、柔軟性、事務処理能力、作成教案、担当授業について、その他の指導項目などがある。

担当の教師の指導下外で、自主的に実習生たちはランゲージテーブル（留学生の日本語に関する質問や宿題の補助、日本語を話す場の提供）や関西弁講座、日本の文化講座なども企画運営出来る。

実習生は、ほぼ毎日、担当の教員の日本語授業を始終見学でき、教授方法を観察し、きめ細かい指導が得られる。授業見学後には教員からの教え方などについてのフィードバックや、教員との質疑応答の機会もある。実習生は作成した教案に対し細かい指導、アドバイスを得ながら添削してもらい、教案を再提出、実習は関西外大に留学している留学生に対して日本語を教えるという実習体験を得られる。

2.2.5 実習生の進路

2.2.5.1 インターンシッププログラム

実習生をサポートする制度として日本語インターンシッププログラムがある。関西

外大では 50 の国と地域における約 350 大学の提携校の中から日本語の TA として 1 年ないしは 2 年派遣するプログラムで、実習修了者の多くがこのプログラムに応募し、選考試験に合格した後参加している。日本語の授業を担当もしくはアシストしながら、日本語教員としての経験を積むことに重点をおいたプログラムで、派遣先大学によっては、授業を無料で受講できるようになっているので、語学力や教養を身につけることも可能である。また大学によっては授業とは別に日本語履修生の個人指導や日本語会話クラブへの参加、Language House の Resident Assistant などといった活動に参加する場合もある。関西外大のインターンシッププログラムは 1990-1991 年度 3 名の TA 派遣から始まるが、当初は外国語学部から選出されており、翌々年から日本語教員養成課程を修了した学生から選出してきた。派遣先によっては学期中の寮費、食費が免除され、その上、大学において授業も無料で受講できる場合もある。毎年約 10 名前後のインターンを派遣し、2011 年度までに、140 名のインターン派遣生を輩出してきた。2012 年度は 9 名を予定しており、この数を加えると 150 名となる。2 年の派遣大学では、MA が取得できるところもある。現在の派遣大学は、アメリカ、南米、ヨーロッパである。卒業後のインターン派遣前に 2 カ月間の実習期間もあり、実習期間の再トレーニングが用意されている。実習の時と異なるレベルにおいて再トレーニングができ、内容は実習の時より実践的なものとなる。派遣先大学は年度により異なるが、今年度の派遣先の国と大学名は次の通りである。大学の数が実習生の数より多いのは、TA 派遣の要請大学が多い時は、2 年目、3 年目の TA 希望も許可しているためである。

アメリカ : Appalachian University

Bates University

Colby College

Lewis & Clark

Marshall University

Middle Tennessee

Mount Union College

Union College

Wake Forest University

ハンガリー : University of Pecs

エクアドル : Universidad of Espiritu Santo

アルゼンチン : Universidad Blas Pascal

2.2.5.2 インターンの応募資格と選考方法

中宮学舎において日本語教員養成課程を履修している者で、留学生別科での日本語実習を修了している者、もしくは次の春学期に実習を行う予定の者。または穂谷学舎において日本語教育実習演習を履修している者。このどちらかの条件を満たした上で TOEFL が 500 点以上の者に応募資格がある。大学院希望の場合は最低 525 点(550 点)が望ましいが、要求される点数は各大学の基準によって異なる。

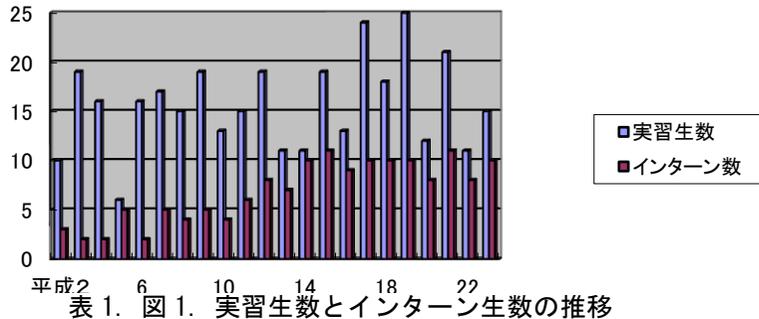
選考方法は応募資格の条件を満たす希望者に対して次の選考を行う。

1. 日本語教育能力検定試験に類似した筆記試験
2. 日本語面接
3. 日本語の模擬授業

受験申込は 11 月中旬の 1 週間、選考試験は 12 月中旬に行われる。

2.2.6 実習生とインターン生の推移

| 年度 | 実習生数 | インターン生数 |
|------|------|---------|
| 平成 2 | 10 | 3 |
| 3 | 19 | 2 |
| 4 | 16 | 2 |
| 5 | 6 | 5 |
| 6 | 16 | 2 |
| 7 | 17 | 5 |
| 8 | 15 | 4 |
| 9 | 19 | 5 |
| 10 | 13 | 4 |
| 11 | 15 | 6 |
| 12 | 19 | 8 |
| 13 | 11 | 7 |
| 14 | 11 | 10 |
| 15 | 19 | 11 |
| 16 | 13 | 9 |
| 17 | 24 | 10 |
| 18 | 18 | 10 |
| 19 | 25 | 10 |
| 20 | 12 | 8 |
| 21 | 21 | 11 |
| 22 | 11 | 8 |
| 23 | 16 | 10 |
| 計 | 343 | 150 |



2.2.7 他の実習生の進路

実習生は日本語教員能力検定試験を受けることが前提となっており、実習修了者の中から毎年 1～2 名合格している。インターンシップ以外の進路として、国内での日本語学校の日本語教師、英語教員採用試験に合格した者は中高の英語教師、国際交流基金、海外青年協力隊を通じて海外派遣の日本語教師、国内外の大学院への進学、企業への就職などがある。

日本語教育養成課程の科目としては 2 年次配当の日本語学概論から始まり、実習に終わるが、実習を履修するまでのハードルは高い。上記のように、①から⑥の各号の要件を全て満たしていないと、書類選考で不合格になる。さらには、スペイン語学科の学生は専門外である英語教職をも履修し、500 点以上の TOEFL 点数も必要とするため、さらに高いハードルとなるが、それでも毎年 1～2 名の合格者がいる。残念ながら各号の要件の一つでも満たさなければ不合格になり実習を履修出来なくなる。しかし、その中から日本語教員を強く目指す人は、卒業後の次年度に実習のみを履修する科目等履修生として認められれば実習が受けられる。実習のみを履修する科目等履修生の数は少なくない。

実習を希望し書類選考の条件を満たし合格した学生の割合は、年度により差があるが 34%から 83%と幅があり、平均すると 60%となる。しかし、次年度に科目等として実習クラスに来る学生の数を加えると、各年度、実習を希望していた当初の人数とほぼ同数となっている。

日本語教員養成課程を修了するためには概論から始まり実習で終わるが、概論を取った学生の約半数が日本語学Ⅰ、Ⅱを履修し、そのうちの約半数が教育法を取り、実習を受けていることになる。

3. 日本語教育実習報告書

3.1 実習生リスト

2011年度の実習生は以下16名、内、秋学期の実習生は11名、春学期の実習生は5名である。

| | 氏名 | 担当 | 担当クラス |
|--------------------------------|--------|-----|---------|
| 実習期間 [9月26日 (月) ~10月17日 (月)] | | | |
| 1 | 佐野 僚亮 | 渡嘉敷 | SPJ1ABC |
| 2 | 桑田 裕子 | 英保 | SPJ2ABC |
| 3 | 藤瀬 涼子 | 本橋 | SPJ2DE |
| 4 | 井上 智美 | 内藤 | SPJ2FG |
| 5 | 岡田 加奈子 | 小村 | SPJ2HIE |
| 6 | 西條 佳南 | 宮内 | SPJ3AB |
| 実習期間 [11月7日 (月) ~11月28日 (月)] | | | |
| 7 | 正木 香菜 | 渡嘉敷 | SPJ1ABC |
| 8 | 井上 尚也 | 武藤 | SPJ1DE |
| 9 | 高比良 幸奈 | 英保 | SPJ2ABC |
| 10 | 平野 梓 | 本橋 | SPJ2DE |
| 11 | 鷺下 綾 | 内藤 | SPJ2FG |
| 実習期間 [2月7日 (火) ~2月27日 (月)] | | | |
| 12 | 芝原 実和 | 英保 | SPJ2DEF |
| 13 | 加納 美希 | 渡嘉敷 | SPJ2ABC |
| 14 | 古屋 志穂子 | 高屋敷 | SPJ1CD |
| 15 | 和田 梨沙 | 小村 | SPJ1AB |
| 16 | 藤原 理沙 | 宮内 | SPJ3ABC |

3.2 実習生の感想

実習を修了した11名に①実習で学んだこと・得たこと・これからの課題と②実習の感想・コメント・先輩へのアドバイスのレポートを課して、8名から回答を得た。以下それらを掲載する。

① 実習で学んだこと・得たこと・これからの課題

今回の実習は、三週間という大変短い期間であったが、その中で色々なことを経験

し、学び、得ることができたと感じる。まず初めに、留学生を実際に教えることができたということが大変貴重な経験であった。先生方も仰っていたが、やはり、本校のように、実際に留学生相手に授業を行える環境は日本全国を探してもそんなに多くないのではないだろうか。たとえ、1~2回の実習授業であろうと、実際に教壇に立ち、教えるという機会を下さった先生方、センターに感謝したい。そして、実際に授業を行い、感じたのが、「準備」というものがどれだけ難しく、大変であり、また重要であるかということである。我々のような実習生といった経験が浅い、または経験がない人間も、ベテランの先生方も、黒板の前に立ち、教壇に立てば同じ日本語教師である。明らかであり、目に見えるその「経験の差」を埋めてくれるのが「準備」だと考える。経験の差を完全に埋めることができるわけではない。しかし、それが我々のような経験がない人間には必要不可欠であり、絶対に怠ってはいけないものなのである。一生懸命、周到に準備することで、様々な状況に対応でき、スムーズに授業を行うことができる。実際、自分もしっかり準備をしたつもりであったが、ミスやパニックに陥ってしまうことがあった。やはり「準備」がとても重要だと感じた。

この他、必要だと感じたのは、やはり知識の量である。これは経験と同じく、これからもっともっと勉強し、多くのことを経験し、身につけていくものだと考える。これらの、今回の実習で経験し、学び、得たことを「教育者になる」ということにおいて、しっかりと活かしていきたいと考える。

② 実習の感想・コメント・後輩へのアドバイスなど

先にも書いた通り、短い期間ではあったが、たくさん勉強させて頂き、そして貴重な体験をさせて頂き、本当に感謝の気持ちでいっぱいである。先生方の授業の見学、そして実習授業と、大変ではあったが、いい経験になったことは間違いない。この世界は「技を盗んでナンボ」、そう考えると本校の実習は最高であったと感じる。

「生の留学生を相手に授業を行えるなんて本当に貴重である。」そう感じながら、後輩の皆さんには実習に取り組んでもらいたい。毎日、授業準備や、学生の把握など、また一味違った教育実習は本当に大変である。しかし、この実習の有難味を理解し、望めば、もっともっと充実した、実りのある実習になるだろう。

(外国語学部 英米語学科 4回生 井上 尚也)

① 実習で学んだこと・得たこと・これからの課題

3 週間の実習で一番学んだことは、いかに自然なコンテキストを学習者に与えられるかということだ。学校で英語を学習したとき、日本語を英語に変えなさい、もしくは訳しなさいという指示が多かったが、日本語教育の場ではそのような指示はない。的確なコンテキストが与えられることで、学習者はその表現がいつ、どのように使われるのか、どのような機能があるのかを理解することができる。そして、再びそのコンテキストが与えられたとき、学習者がその表現を正しく使うことができるように導くことが、教師の仕事だと学んだ。先生方の授業を観察させて頂き、様々な練習方法や指示の出し方を学び、得ることができた。また、学習者はそれぞれの活動にどのような反応をするのかも知ることができた。そして、機能的な導入と効果的な練習をするためにはコンテキストが欠かせないということを改めて認識した。これからの課題は、このようなコンテキストをたくさん用意することはもちろん、それらをどのように提示するのか、どのような形式で練習するのか、学習者のレベルに合っているのかを考えることである。これらのことを十分に考え、的確な指示を与えると、学習者は教師の意図やその活動の目的を認識することができ、効果的な学習に繋がると思う。学習者が自分から積極的に日本語を使えるような活動を与えられるようになることが、私の目標だ。

② 実習の感想・後輩へのアドバイス

実習中は指導教諭の授業を毎日観察することができ、本当に学ぶことが多かった。学んだことを授業実習で使おうと授業計画を立てたが、うまくいかなかったところや改善すべきところがたくさん見つかった。授業実習前後に指導教諭から適切なアドバイスやフィードバックが頂け、授業計画を立てる上で大事なことや、どのように改善すればよいのかを知ることができ良かったと思う。また、授業実習後は違った視点で授業観察ができ、先生方の工夫の仕方や、それに対する学習者の反応を見ることができた。

3 週間の実習期間は授業観察がほとんどなので、ただ授業を見ているだけでは何も得ることはできない。先生方の授業では、指示の出し方、日本語と英語を使うバランス、時間配分、誤用訂正の方法・タイミング、授業の流れ、練習の形式などで様々な工夫が見られる。できるだけ多くのことに目を配らせ、吸収する姿勢が大事だと思う。授業実習ではこれら全てのことをうまく進めることはできないと思うが、その後の振り返りを大事にしたい。また、教室外の教師の仕事を観察したり、お手伝いしたりす

ることで得られることも多い。特に宿題添削では、学習者が文法や表記でどのように間違えるのか、どのような誤用が多いのかを知ることができる。日本語教員という職業を様々な視点から把握することができる3週間になると思う。

(外国語学部 英米語学科 4回生 正木 香菜)

① 実習で学んだこと、これからの課題

今回3週間日本語教育実習を終え、たくさんのことを学び、感じ、そして経験することができました。

私は、SPJ2のクラスで実習をさせていただきました。日本語教育は近年漫画やアニメの影響でマスコミでも取り上げられ、日本語を学ぶ外国人、そして彼らに対する日本語教育、その現場も注目されてきてはいますが、まだまだ未知の部分が多く、実際に教育を間近に見るということはありません。実際に関西外国語大学の留学生を対象とした日本語の授業も、実習生しか見学することはできません。そんな中、実習生として3週間という期間、実習で見学、そして体験する機会を得られ、本当に貴重な経験となりました。主な実習内容はテスト採点、宿題の添削・返却、ハンドアウトの印刷、クラス見学、授業でしたが、それぞれの内容で学ぶこと、感じるがありました。特に私が強く思うことがあったものが3つあります。

まず1つ目は、宿題の添削においてです。添削をする目的はただ間違いを学習者の誤用を訂正し、その傾向を把握し、テストに出すということだけではなく、授業の内容の検討、例えば反省や、それをどうやって次の授業に活かすかということにも繋げることが必要となるということ、そして生徒の反応やテストや後日の復習から教師が誤用を把握し、それを踏まえた説明をすることで誤用、誤解が少なくなっていることがわかりました。

2つ目は、クラス見学においてです。担当の先生をはじめ見学させていただいた先生方の工夫（動作やキューの出し方、フィードバック法、タイミング、構成）、それぞれのレベルの留学生の様子を生で見ることができました。大学における日本語教育課程の今までの授業や、検定試験対策の中で学んできた教育理論を実際に活用した姿を実際に見ることができ、自分が教壇に立った時に試してみたいというもの、理想も見つけることができました。先生方の工夫は本当にそれぞれ異なった個性を持っていましたが、共通していることが、全ての先生方が授業に常に情熱を持って、留学生にとってどのようにするとわかりやすいか、コンテキストは自然か、授業にいかに惹き

つけるかということを考え、先生の行動には必ず意味があり、無駄がないことでした。

そして、3 つ目は実習授業においてです。当たり前のことなのですが、授業は自分が思っているようにはいかないということを痛感しました。授業中や反省から一番強く感じたことは、学生が協力してくれたからこそできた、見守られているということでした。しかし、大学を卒業し、一歩外に出て教壇にたつと、学習者全員志が高く、好意的だとは限りません。その中でも生きていくには、一緒に勉強する先生であっても、このような見守られる先生であってはいけません。そこでそのようにならないためには、より多くの専門的な知識を得ること、それをどのように教室活動で活かすかということや、また多方面にアンテナを張りめぐらせ教育へとつなげていく方法を思考すること、どれだけ授業に工夫を凝らすことができるかなどを自分なりに考え、常に念頭におき日常生活を送ることが必要だと感じ、思いました。

② 後輩へのアドバイス

実習前は4年間勉強してきたといっても未知の世界に踏み込むので本当に不安だと思いますが、事前にできることを見極め、1つ1つしていくことが大切だと思います。例えば、図書館などで日本語教育の関係の本を読むこと。大学の図書館には、親しみやすくわかりやすく書かれたものから、より専門的なものまで沢山あります。また文法書だけではなく第二言語習得に関するものや心理学に関するものも読んでおくと良いかと思います。また日本語教育課程の授業（文法や指導案の作成法など）の復習をすることも実習では即戦力となります。限られた実習期間ですので、より充実したものにするために今できること、今しかできないこと、今やるべきことを判断し、頑張ってください。

(外国語学部 英米語学科 4回生 桑田 裕子)

私はこの日本語教育実習を通して、日本語を教えることの難しさや面白さを学ぶことが出来ました。また、日本語の教え方などの技術面でもたくさん勉強出来たと思っています。

まず思ったこととして、毎日意識せずに使っている日本語を第二言語として留学生に教えるという事は、とても難しいことだという事です。動詞の活用の仕方など、ある程度は学部での日本語教育の授業で勉強していましたが、実際に留学生に教えるとなると教える以上に知識が必要で、どう説明すれば分かりやすいのかということに苦

労しました。教科書に書いてある事だけでなく、色々なことを聞かれた時に困らないくらいの知識を身につけ、自分の言葉でもっと詳しく伝えられるくらいになる事が今後の課題だと思っています。

また、実際にCIEで働いておられる先生方の授業を3週間見学させていただき、授業での工夫や生徒との関わり方、日本語の練習の技術など、たくさん吸収することができました。実際に留学生相手に授業をする実習があり、やはり教案通りには出来なかったし、課題もたくさん見つけましたが、担当して下さっていた先生の知識の豊富さと、アドバイスに助けられ無事に授業実習を終えることができました。

この日本語教育実習で日本語学習者の授業見学・参加をさせていただき日本語を教える事の面白さを知りました。たった3週間ですが、留学生の日本語がどんどん上達していくのを見ているとなぜか嬉しかったです。これが日本語を教えることのやりがいの1つなのかと感ずることができ、とても貴重な経験ができたと感じています。

(外国語学部 英米語学科 科目等履修生 平野 梓)

① 実習で学んだこと・得たこと・これからの課題

日本語教育実習は外大での日本語教育課程の締めくくりとしてふさわしい経験になりました。実習では、今まで日本語の授業で学んできたことを実践することができたというのが一番大きな財産になりました。まず、日本語教員という仕事のいろいろな面を見ることができました。授業はもちろん、出席管理、宿題の添削やテストの監督など普段見ることのできない日本語教員の一日を見ることができました。また、実習中は他の実習生たちと企画し合って、ランゲージテーブルを設置しました。ランゲージテーブルには日本語が苦手な学生から、積極的に日本語を学習したい学生までいろいろな学生がやってきます。彼らをチューターすることで、自分の担当外のレベルの学生がどのようなことを学習し何を苦手に思っているのか、また日本語学習者共通のつまづきなどを知ることができます。彼らとともに学習することで、日本語教員として自分に足りないところが明確に見えるようになりました。たとえば、日本語の文法についての知識はもちろんのこと、日本文化についても広く日本語教員は知っていなければいけないと強く感じました。実習授業は、教える文法項目をどうすれば自然に導入できるかなど、考えることや準備することがたくさんあり、実習の山場と言えるところでした。授業当日は学生に教えている様子をビデオカメラで録画していただくことができたのですが、後からそれを見ることで、自分の授業の様子を客観的に振

り返ることができたのでとても役に立ちました。

実習を振り返って感じた私のこれからの課題は、より深い日本と日本語についての知識を得ることと、学生を惹きつける授業をすることです。日本語の先生方の授業を見学させていただく中で、自分にはまだまだ知らないことがたくさんあることを思い知りました。まずは初級日本語の文法を完璧に把握すること、それから日本や日本文化について英語で説明することができるようになりたいと考えています。また、学生の興味や関心をつかみ、学生が飽きることがないような授業づくりができるようになることも今後の課題です。

② 実習の感想・コメント・後輩へのアドバイスなど

実習では特に教えることの難しさに苦しみましたが、それ以上に日本語教師という仕事のおもしろさをたくさん知ることができ、絶対に将来は日本語教師になりたいと思うようになりました。いまは「日本人である自分だから教えることのできる日本語の授業」を目指してがんばりたいと思っています。これから実習に行かれる方には、実習では学ぶことや挑戦する機会がたくさん与えられているので、何事も積極的にたくさん経験をしてほしいと思います。

(外国語学部 英米語学科 4回生 藤瀬涼子)

この教育実習は私にとってとても貴重な三週間となりました。指導教官の先生をはじめ、留学生別科の先生方に直接ご指導いただき、学ぶことの多い実習期間でした。

先生方の授業観察を通して、授業の進め方、学習者の訂正の仕方、質問の仕方など毎回の授業で新たな発見があり参考にさせていただく点が多くありました。特に、どのように既習項目を盛り込みながら内容を広げていくか、どのように日常生活に近い状況設定を行うかという点はとても勉強になりました。

実際に授業をさせていただき、学習者の表情や反応を見ながら説明を加えたり、質問をしたり、細かいところに気を配る大切さや、訂正する際にヒントを与え学習者自身に発話させる難しさを実感しました。教案通りにいかないこともあり、授業で習得した理論だけではなく、学習者とのコミュニケーションを通して授業を作らなければならないということを実感しました。

この三週間は反省点を含め多くのことを学ぶことができ、課題も多く見つかりました。この実習を通して見つけた課題を今後の生活に活かし、一つ一つ改善していき

いと思います。

最後に、来年度教育実習をされる方へのアドバイスとしては、まずは教科書を熟読しておくこと、そして、できるだけボランティア活動等に積極的に参加することです。留学生とのコミュニケーションを通して、学習者はどのようなところで間違えやすいかなど勉強になることが多く実習の際にも役に立つと思います。教育実習では、実践から多くのことを学び、有意義な三週間にしていってほしいと思います。

(外国語学部 英米語学科 科目等履修生 高比良 幸奈)

① 実習で学んだこと・得たこと・これからの課題

たった3週間というのはあっという間でしたが、関西外大の日本語教員実習では本当に多くのことを学ぶことができました。まず、先生方の授業を見学させていただく中で学んだことは、一口に日本語を教えるといっても対象者の性格や国籍によって効果的な教え方が異なり、同じ単元を同じティーチングプランで教える場合にも、クラスによって導入の順序が自然と変わる場合もあるということです。先生方によって教授法が異なるのはそれぞれの先生の経験や信念に基づいてのことで、学習者に対する細かな工夫もすべて学習者が学びやすい環境を作るためでした。そして何よりも、教師と学習者との間に信頼があるからこそ授業が成り立つのであり、教師が一生懸命であればある程、学習者はそれに応えてくれるのだということを感じました。

また、自分の授業を通して学んだことは、ティーチングプランをしっかりと考えることも大切ですが、それ以上に学生からの質問に応えられるよう知識を習得することや、状況に合わせて対応する臨機応変さの大切さです。そして「教えること」の難しさや「教えたこと」が伝わったときの嬉しさも得ることができました。また、授業時間以外でも「ランゲージテーブル」を担当する中で、最初はひらがなもなかなか読めなかった学生が努力を重ねて、実習が終わる頃にはある程度の文章まで作ることができるようになったのを見て、本当に嬉しくなりました。

これからの課題は、まず学習者からの質問にもきちんと答えられるよう知識をつけることです。そして、どうすれば学習者が勉強したいと思う雰囲気を作ることができるのか、ということです。それは、「ほめ方」や「学習者が興味をもつ話題やアクティビティーを取り入れること」などであると思います。自分なりに工夫をし、学習者が学びたいと思えるような授業の工夫をしていきたいと思っています。

② 実習の感想・コメント・後輩へのアドバイスなど

実習を終えて、先生方が授業中にスムーズに行っていることでも、実際に自分がやるとなるとどんなに難しいかを感じました。それは、先生方が学生としっかりとした関係を築かれているからこそなせる技だと思いました。実際に授業をさせていただきただけでなく、なかなか見学できない先生方の授業を見学する機会を与えていただいたことを、大変ありがたく思っております。私自身は3週間仕事でお休みをいただき臨んだ実習だったので、自分がやりたいことに集中できる貴重な時間を大切に、吸収できることはできるだけ吸収しようという思いで実習期間を過ごしました。実際に自分が授業をする前日には遅くまで残り、授業で行う通りに予行演習を何度も行いました。

関西外大の先生方の授業は工夫されていて、私自身先生の授業を受けたい、と思うぐらいでした。そんな先生の下で学ばせていただけるこの実習は、本当に貴重な時間だと思います。後輩のみなさんにも、この貴重な機会をぜひ大切に、実習に取り組んでほしいと思います。

(外国語学部 英米語学科 科目等履修生 岡田加奈子)

① 実習で学んだこと・得たこと・これからの課題

関西外国語大学での日本語教育実習を終え、多くの事を学びました。まず始めに既習文法項目をきちんと把握し、授業で使うことです。当たり前のことかもしれませんが日本語を母語とする私たちはふとした時に未習の文法を使った表現を使ってしまうからです。また、既習項目を使った表現を授業で使うことでその文法項目の定着にも繋がるからです。2つ目は授業の始めに行う復習の重要性を学びました。復習をすることで前回の授業で何を学んだのかを再確認させることができ、また、今から学ぶ文法項目を理解する手助けになるからです。授業形式で学んだことは板書とパソコンのメリットとデメリットです。板書は書くのに時間が掛かりますが、消さない限り黒板に残ります。一方でパソコンは黒板に書く必要がないので、時間を取りません。しかし学生にとって文法説明などを書き取る時間も短いです。ですので、板書とパソコンの両方を上手く利用しながら授業を進めていかなければならないということを学びました。

教育実習で得たことは、レアリアを使った導入が有効であることと、インフォメーションギャップのある活動の重要性です。レアリアを使うことで学生は導入で使う

場面を理解しやすくなり、意味を推測しやすくなったと思います。インフォメーションギャップのある活動では、練習におもしろさが生まれ楽しみながら活動することができました。

今後の課題として、豊富な文法知識を身につけること、授業で明確で簡潔な指示を出せるようになること、宿題などの添削の訂正の仕方などが今後の課題としてあげられます。

② 実習の感想・コメント・後輩へのアドバイス

本当に貴重な体験をすることが出来た3週間でした。普段は見ることの出来ない日本語プログラムの授業を見ることができ、そこで日本語教師に必要な知識と教授技術を学ぶことが出来ました。授業見学や模擬授業だけでなく、宿題の添削活動も手伝わせてもらい、普段先生方が行っている作業の一部を垣間見ることが出来ました。また今回の日本語教育実習では、教師としての資質、そして、社会人としての資質についても一度考え直す機会となり、人間的にも成長することの出来た3週間でした。教育実習までに文法知識を出来るだけ増やしておいた方がいいです。担当するレベルの文法項目はもちろんですが、ランゲージテーブルではいろいろなレベルの学生が質問しに来るので、どんな質問にも答えられるように文法知識を身につけておいた方がいいです。教育実習第一期派遣の人は、日本語教育能力検定試験との日程がとても近いので、検定試験を受験する人は、事前にきちんと対策を立てておいた方が良いと思います。

(外国語学部 英米語学科 4回生 佐野僚亮)

4. まとめ

関西外国語大学中宮学舎における日本語教育養成課程の始まりから2011年までの教育実習の概要を説明するとともに、実習生の動機付けとなるインターンシッププログラムの概要と内容を見てきた。日本語教育養成プログラムでの教育実習のあり方を考える際になんらかの参考になることを祈るものである。

関西外大日本語教員養成課程が始まって以来25年間、大勢の実習生、インターン生を輩出してきた。彼らの多くが国内外で日本語教育に従事していることは事実であるが、はっきりした進路状況は把握できていない。これから、彼らの進路状況の実態を調査するとともに毎年の実習生の報告も行っていきたい。